

教育者・保育者を目指す学生のキャリアマネジメント力や その実行力向上と児童のレジリエンス能力向上への取り組み① —オンラインを活用した実践—

安東 綾子・矢野 洋子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年5月24日受付、2022年7月4日受理)

要 旨

本研究は、養護教諭をめざす学生のキャリアマネジメント能力やその実行力の向上と放課後児童クラブの児童を対象に児童のレジリエンス能力の向上に向け、オンラインを活用した取り組みを行い、学生と児童の取り組みから、どのような学びや影響があるかについて明らかにすることを目的とし、実践をおこなった。

養護教諭をめざす学生のキャリアマネジメント能力とその実行力については、今回の経験が今後の実習や教員になったときに役立つと感じた学生がほとんどで、児童の実態に合わせた授業内容で実施することで、児童の実態にあった授業や活動の実施の重要性を体験できたと考えられる。また、「対面でなくても授業体験ができること」や、「なかなか授業をする体験ができなかったので、オンラインでも体験できて良かった」とあり、阿部(2022)と同様に、オンラインを使ってもある程度、対面で行ったときと同等の学びが得られることが明らかになった²⁾。また、オンラインで実施する上で、パワーポイントや動画の作成を学生が行ったことで、新たな教材に関する知識が得られ、対面で実施する以上の知識が得られたと考えられる。

次に、授業を受けた児童への効果については、実施した内容の理解についても、感想の多くは肯定的であったため、概ね無理のない内容になっていたと考えられる。また、「いらいら、もやもやの気持ちがあった」「深呼吸をいつするのかわかった」など理解の度合いや今後の活用について書かれている感想もあり子どものレジリエンス能力の向上に寄与すると思われる。今後は、放課後児童クラブの保育士と連携を図り、継続的な指導を行ったり、オンラインを活用した定期的な授業と振り返りを繰り返したりすることで、児童が授業で得た知識等の活用状況について調査し、レジリエンス能力の向上をさらに明らかにしていきたい。

キーワード：オンラインの活用 カリキュラムマネジメント力 実行力 レジリエンス能力

1. はじめに

1. コロナ禍における教員・保育者をめざす学生の状況について

2019年、中国の武漢から広まった新型コロナウイルスの感染拡大を受け、日本では、2020年の2月ごろからその影響を受け始め、2020年4月から大学の講義は、遠隔での実施が余儀なくされ、その影響は現在も続いている。教員・保育者養成においては、必要不可欠な実習も感染状況を見ながら実施されている現状があり、実習先での受け入れができない場合には、学内で実習が行われている例もある。また、コロナ禍前は、実習以外にも、ボランティア活動をはじめとした体験的な活動も多く取り入れることができていたが、実施できない状況が続いており、教員や保育者を目指す学生が実際に児童や子どもに関わる体験学習が不足している現状がある。

このような状況下で、オンラインを活用した講義実践の報告や研究は増えている。その多くは、教員が計画、実施した講義について、学生の学びやその効果に関するものが多い。教員・保育者養成においては、実習が実施できなかった場合の学内実習にオンラインを活用し、教育・保育現場とつなぐ取り組みが行われたり、今まで講義内で教育・保育現場に見学しに行っていたものを、オンラインで行ったりと試行錯誤が行われている。例えば、大森ら(2021)は、保育者を目指す大学生1年生から3年生までのゼミ活動・保育内容に関わる講義・実習の事後指導において、保育参加を実施していた部分は、附属幼稚園からの画像や動画

の提供と教員によるオンライン授業を実施したり、一部の学生を附属幼稚園に来園させて、その様子をオンラインで様子を見て、その後教員と振り返りを行ったりして、オンライン授業の在り方を検討している¹⁾。保育参加では、「実際に見たり、触れたり」して学ぼうとしていたが、オンライン講義では、その姿をどう考えたり、捉えたりするか、教材研究の重要性、指導上の留意点など、保育行為の根拠となる考え方や捉え方に言及しているという違いが見られたりしており、学生自身の学ぶ力だけに頼るだけではなく、意図的計画的に学びの内容を仕組むことにより、最低限抑えたい学びが保証できたのではないかという、新たな効果を示している¹⁾。阿部(2022)では、「保育内容演習(表現)」の授業の一環で、劇遊びの指導を行う上で、活かせる知識を身につけることを目的とし、大学とこども園(保育園)をオンラインでつなぎ、双方向型でのオペレッタ公演を行っている²⁾。その結果、学生の満足度は非常に高く、対面式の公演と変わらない感想が出ており、オンラインによる双方向型の公演に特筆すべき学びがないと記している²⁾。また、見る側の子どもの様子や保育者からの感想からは、落ち着きのない子どもも座ってみていたことや、プロジェクターを使って映画を見る時より集中しており、学生たちが子どもたちの動きに対して、呼応していることも興味深かったのではということが記されており、学生や子どもに対面で行う場合と同等の学びや気づきを双方に与えられることを示唆している²⁾。

しかし、まだまだオンラインを活用し、学生の体験や経験を補完するような取り組みは模索中であると考えられる。

2. 子どもや児童の現状(新型コロナウイルス感染症の影響を含む)

現在、幼児や児童の発達が気になる、いわゆる「気になる子ども」が増えているとよく聞く³⁾。文部科学省は、2019年に「日本の特別支援教育の状況について」にまとめており、2012年(平成24年)に行った調査によると発達障害(LD・ADHD・高機能自閉症等)の可能性のある児童生徒が6.5%程度在籍しているという結果が得られている。また、子どもの数が減っているにもかかわらず、特別支援学校に行く子どもは、平成19年と比較して1.2倍、特別支援学級は、2.1倍、通級は、2.4倍と支援を要する子どもは増加している³⁾。

また、児童虐待は増加の一途をたどっている⁴⁾。さらに、コロナ禍に伴い、子どもが家庭にいる時間の増加や保護者の在宅勤務等の変化に伴い、虐待の潜在化リスク、地域の見守り機会の減少から児童虐待のリスクが高まる可能性を秘めている⁴⁾。亀田ら(2022)は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、行動制限等の対策がとられ、ストレスの高い状況である学童期の子どもをもつ家庭の実態調査を行い、家庭における保護者と子どもの状況と課題を明らかにしている⁵⁾。その結果、「家族の心の問題」や「家庭内の人間関係」「知人との人間関係」にストレスや不安が大きいことが示唆された⁵⁾。また、子どもの接し方の変化については、「子どもとかかわる時間が増えた」「子どもの様子に注意を払うようになった」などポジティブな変化があるものの、「自分一人の時間が欲しいと思う」「子どもにきつくいってしまうが増えた」「子どもの言葉にイライラするようになった」などのネガティブな変化も見られ、他地域に比べ、東京都の保護者に多くみられることが明らかになっている⁵⁾。コロナ禍の影響を受け、都市部に住む保護者は特に、子育てにストレスをかかえている可能性も十分に考えられる⁵⁾。さらに、厚生労働省が「コロナ禍の子育て支援策」(2021)の資料に、新型コロナウイルス感染症のひとり親家庭への影響に関する緊急調査の結果が記載されており、2020年の年末にむけての暮らし向きについて「苦しい」ひとり親世帯は、60.8%と、ひとり親世帯以外と比較して高い結果となっている⁶⁾。これらの結果からも保護者の子育てに関する環境の変化は大きく、困難感を抱えていることが予想される。そこで、厚生労働省は、支援対象児童等見守り強化事業を実施するなど、虐待防止につながるよう行政も働きかけている⁶⁾。

以上のように、保育者や教員を目指す学生の状況や子どもや児童の現状から、保育者や教員を目指す学生の体験・経験活動の確保と現場に出たときに役立てられるように、カリキュラムマネジメント力とその実行力を向上させていく必要がある。また、子どもや児童にとっては、保護者の抱える子育ての困難さからくる虐待やコロナ禍の不安、これら以外にも友達関係がうまくいかないなどの窮地に陥るリスクが高まっている。そのため、子どもたちのレジリエンス能力の向上も求められるだろう。

II. 目的

そこで本研究では、養護教諭をめざす学生のカリキュラムマネジメント力とその実行力の向上と、放課後児童クラブの児童を対象に児童のレジリエンス能力の向上に向け、オンラインを活用した取り組みを行い、学生と児童に取り組みからどのような学びや影響があるかについて明らかにすることを目的とする。

III. 方法

1. 対象者

(1) 養護教諭1種免許状の取得を目指す学生

短期大学卒業時に養護教諭2種免許状を取得し、専攻科で養護教諭1種免許状の取得を目指す1年生22名対象とする。また、保育士を有する学生もいる。

(2) 放課後児童クラブの児童

小学校1年生～3年生 合計123名で福岡県内の5か所の放課後児童クラブの児童が参加した。

2. 実施時期

令和4年1月中旬

3. 実施方法

(1) 養護教諭1種免許状の取得を目指す学生の実施内容

「福祉学特論」の講義において以下の通り取り組みを行った。

まず、前半10コマでは、児童虐待を中心とした子どもが抱える諸問題について講義や演習を行い、基礎知識の習得をめざした。11コマ以降は、放課後児童クラブの現状から、学生と筆者らがカリキュラムマネジメントを行い、授業計画をたてた。その後、学生間で役割分担を行い、パワーポイントや動画を作成し、授業の練習を行った。14コマ目と15コマ目で授業の実施とまとめを行った。

学生の振り返りについては、児童からのアンケートを集計し、児童の感想をフィードバックした上で、事前の取り組み、授業の実施、今後またオンラインで授業をする場合の内容と今回の取り組みの学びや今後の取り組み方について聞いた。

(2) 放課後児童クラブの保育士とのやりとりと児童への実施方法

まず、オンラインでの取り組みを行う上で、保育士に放課後児童クラブの現状と課題を筆者（矢野）が聞き取りを行う。児童については、オンライン授業を受け、授業の理解度や難しいところの有無や感想を簡単に記入できるようにアンケートを作成し、授業後すぐに記入するように計画した。

(3) 放課後児童クラブの児童に向けた授業の内容について

保育士から聞き取りを行った児童の現状としては、家庭が抱える問題の複雑さ、落ち着いて過ごせない、落ち着いて過ごせないために子ども同士のトラブルにつながるなどの人間関係の困難さが挙げられた。

そこで、学生と話し合い、子どもたちが落ち着いて過ごす一つの手立てとして、アンガーマネジメントのソーシャルスキルトレーニングやストレスマネジメントでも使用される「深呼吸」を取り入れることを中心として内容を決めることにした。学生は4名から5名のグループを1班とし、「深呼吸」をテーマにした授業を考え、それぞれ発表した後、それぞれの良いところを寄せ集め、ひとつの授業計画を作成した。その結果、友だちとけんかをするという「イライラもやもや」場面を提示し、嫌な気持ちになることがあることを知らせた。そのあと「イライラもやもや」する場面を6事例提示し、クイズ形式でどのような対応をするとよいのか○×で答えられるようにした。また、最後には、落ち着くための「深呼吸」の方法を提示し、実際に児童と一緒に実施するような授業展開を計画した。授業計画の立案後は、放課後児童クラブの保育士に、内容が適切であるか、難しくないか検討していただき、許可を得て実施した。学生が立てた指導案を図1に示す。

学習指導案（略案）

1. 題材名

いらいらもやもやの解決方法を考えよう

2. ねらい

①嫌なことが起きた時を想像することによって、その時の適切な対応について考えることができる。

②嫌なことが起きた時の対処法を知り、実践することができる。

3. 展開

時間	児童生徒の活動	教師の支援	評価	資料
導入 5分	○物語を見て、登場人物がどんな気持ちなのか考える。 ○学校や家でいらいらもやもやした経験を思い出す。	・イラストや物語を見せて、登場人物の気持ちについて考える時間をとる。 ・人と関わる際に、いやな気持ちになることはだれにでもあることを確認する		絵本
めあて イライラもやもやの解決法を考えよう				
展開 15分	○6事例をもとに2択クイズを答える ○いらいらもやもやした時に、心を落ち着かせる「呼吸法」について知る ○「呼吸法」を実践する	・事例の内容に沿った2択クイズを出題し、児童に答えを求める。 ・正解した場合は、もう一度対応方法を確認する。 ・不正解した場合は、どうすれば良いか一緒に考える ・いらいらもやもやした時の会蹴る方法の1つとして「呼吸法」があることを知らせる。 ・「呼吸法」のやり方を動画用いて教える。 ・呼吸法を一緒にする	① ②	2択クイズ 呼吸法の動画
まとめ 5分	○いらいら・もやもやした時の対応や「呼吸法」についてまとめをする。	・いらいらもやもやした時の対応についてのポイントを伝える。 ・「呼吸法」のポイントを再確認する。 ・今後の生活に活かせるように、学んだことを整理する。	①2	

6. 評価のポイント

①嫌なことが起きた時の対応について学ぶことができる。

②嫌なことが起きた時の対処法を実践することができる。

図1 授業計画（略案）

(4) オンライン授業の実施方法について

授業の実施方法については、オンラインウェブ会議システムZOOM（以後ZOOMと記載）を活用した。放課後児童クラブには、事前に参加するためのIDやパスコードを知らせ、授業を開始する30分前より接続のテストを行い開始した。学生は、授業を計画した4名から5名のグループを1班とし、2つの班が2教室に分かれて、同時に2ヶ所～4か所の放課後児童クラブに繋ぎ授業を行った。授業を行わない学生は、実施する教室とは別の教室で授業の様子をZOOMを通して確認した。

IV. 結果と考察

1. 学生の取り組みに関するアンケートについて

学生には、児童の回答をフィードバックし、授業の事前準備、授業内容、授業の困難さ、授業実施の良い点、今後の授業の展望について自由記述を中心としたアンケートを行った。アンケートの回答は、履修した学生は22名のうち19名から得ることができた。

(1) 事前の取り組みについて

事前の取り組みの記述については、「グループでの準備」、「教材研究の工夫や学び」、「実践に関する内容」の3つに分類することができ、「グループでの準備」が31.6%、「教材研究の工夫や学び」が47.4%、「実践に関する内容」が21.1%であった。まず、「グループでの準備」については、準備期間が短かったが役割分担できたこと、グループですること、話し合いによって試行錯誤できたことがメリットとして挙げられていた。次に「教材研究や工夫や学び」については、オンラインで行うことから、教材に関する工夫を行ったことが多く書かれていた。例えば、深呼吸の仕方の動画を作成したこと、事例やクイズをパワーポイントで作成したこと、計画の作成から教材の工夫、実施とさまざまなことが経験できたことが挙げられた。パワーポイントや動画の作成は、対面で行う授業準備ではあまり使用しないことから、学生にとっては教材研究の幅が広がったと考えられる。最後に、「実践に関する内容」については、話し方や伝え方について記述されおり、対面で行う授業と同じように、授業の流れに沿って、話す内容を何度も練習したことや、分かりやすく・理解しやすく・実行しやすいように伝える事の困難さ、児童が親しみやすいように元気に話すことなどが挙げられた。

以上のことから、オンライン授業の準備については、対面の授業と同様に準備が行え、実行力を育成できることが明らかになった。教材研究については、対面での授業以上にICTを活用し、新たな視野が広がり、工夫する力が培われるためさらに効果が高いことがわかった。

(2) 実施内容（授業の内容）について

授業の内容については、児童の実態に則し適切であったか「適切と感じた」「どちらかという適切だと感じた」「どちらともいえない」「あまり適切ではないと感じた」「適切ではないと感じた」の5件法で聞くとともに、その理由を自由記述で求めた。その結果、「適切だと思う」47.4%、「どちらかという適切だと思う」52.6%で、肯定的な回答が得られた。

その理由としては、事前に聞いていた実態に則して授業の内容を計画し実施できたこと、コロナ禍のストレス解消につながる、「イライラ・もやもや」することは誰にでも起きることとその対処法の汎用性の高さから適しているという意見が多かった。また、画面を通して児童の様子を見たことが踏まえられた記述も2件あり、「授業を始める前の様子を見てみると、走る様子がみられたり、静かになるまで時間がかかったりする姿があり、感情をコントロールする方法を伝えることは、実態に適した授業であったと思う。」などと書かれていた。以上の記述から対面での経験と同じような効果も得られたと考えられ、カリキュラムマネジメント力に必要な子どもの実態との結びつきがオンラインでの体験においても身につくものと考えられる。

(3) 授業実施の困難感について

授業実施の困難感については、自由に記述をもとめた。困難感については、オンラインならではの内容が68.4%と多く見られ、特に「反応に時間差があり、かみ合わない」、「児童の声が聞こえないため伝わっているかわからない」「反応や様子がわかりにくい」などが挙げられた。

そのほかは、対面での授業と変わらないような、「児童から予想外の質問が出て困った」、「児童にわかり

やすい言葉づかい、理解しやすいように説明することが難しい」などの授業の困難感が挙げられた。今後は、事前の練習等を増やすことで、オンラインならではの困難感を軽減させていけば、授業実施自体は、対面ですることと変わらない効果が得られると考えられる。

(4) 授業実施の良かった点について

授業実施の良かった点についても、自由に記述を求めた。良かった点としては、子どもの反応に関することが36.8%で、「楽しそうに参加してくれた」「クイズを取り入れたことで反応がつかみやすかった」「呼吸法の動きを入れることによって子どもと一緒にやってくれてよかった」などが挙げられた。また、オンラインでの取り組みに関するものが36.1%挙がっており、「オンラインで授業する体験ができて良かった」「実際に行かなくても児童と触れ合えることがよかった」、などがあつた。また、オンラインで実施することから、教材研究に関して、板書では伝わりにくいことを予測し、「パワーポイント」を活用しイラスト等を多く用いたり、呼吸法については動画をあらかじめ作ったりしたことが、子どもの理解の向上につながると感じた学生もいた。

(5) 今回の経験がその後の実習や教員になったときに役立つと思うかについて

今回の経験が今後に役立つかどうかについて、「とても役に立つと思う」、「どちらかという役に立つと思う」、「どちらともいえない」、「あまり役に立たないと思う」、「役に立たないと思う」の5件法で聞くとともに、その理由については、自由に記述を求めた。

その結果、「とても役立つと思う」73.7%「どちらかという役に立つとおもう」21.1%「どちらともいえない」5.3%とほぼ肯定的な回答であった。その理由を分析したところ、大きく2つに分けられ、子どもの実態や様子に即した内容ができたことを挙げているものが42.1%で、現在の子どもの抱えている問題に即時した経験が養護教諭になるにあたって役に立つという内容が多くあつた。これは、カリキュラムマネジメントを行ううえで貴重な経験につながったと考えられる。また、オンラインを使用した経験を挙げているものが、47.4%あり、オンラインでも子どもたちに伝えられることの視野の広がりや、今後のICTを使った学習に役立つと考える内容もあつた。

以上の結果から、学生にとっては、オンラインでも対面と同じように子どもたちと関われることや、そもそもオンラインでの体験ができたことが役に立ったこと、新たな教材観ができたことはメリットであったと考えられる。

2. 放課後児童クラブの児童のアンケート

(1) 授業を受けた児童の人数

授業を受けた児童の人数と男女の割合を表1に、実施したアンケートの内容を図2に示す。

3年生は男児1名でアンケートの内容に未記入が多かったため分析から除外した。また、学年が書かれていなかった児童のアンケートも分析から除外した。

表1：授業を受け児童の人数と男女の割合（人）n=123

	男子	女子	計
1年生	42	40	82
2年生	24	15	39
3年生	1	0	1

授業体験 アンケート

下の問題を読んで、最後まで答えてください。

1. 何年生ですか?あてはまるものに○をつけてください。
 ア 1年生 イ 2年生 ウ 3年生 オ 4年生 カ 5年生 ケ 6年生

2. あてはまる性別に○をつけてください。
 ア 男の子 イ 女の子

3. ズーム授業の内容は、わかりましたか?あてはまるものに○をつけてください。
 ア よくわかった イ わかった ウ どちらともいえない エ あまりわからなかった オ わからなかった

4. むずかしかったところがありましたか?あてはまるものに○をつけてください。
 ア はい イ いいえ

5. むずかしいところがあった人は、むずかしかったところについて書いてください。

6. 授業でわかったこと、おもしろかったこと、もっと知りたいことや感想を書いてください。

図2 児童に実施したアンケート内容

(2) 授業の理解度について

学年ごとの理解度を表3に示す。

表3：学年ごとの授業の理解度

	よくわかった	わかった	どちらともいえない	あまりわからなかった	わからなかった
1年生	35.4%	35.4%	11.0%	7.3%	9.8%
2年生	61.5%	28.2%	2.6%	2.6%	5.1%

全体的には、「よくわかった」、「わかった」が76.9%と理解度は高かった。特に、2年生は、「よくわかった」が61.5%、「わかった」が28.1%と理解度が高かった。しかし1年生は、「よくわかった」、「わかった」いずれも、35.4%で合わせて70.8%と理解はほぼできていると考えられるが、2年生と比較すると低い。

(3) 内容の難しさについて

内容の難しさについて学年ごとの結果を表4に示す。

表4：授業内容の難しさについて

	難しかった	難しくなかった
1年生	19.5%	70.7%
2年生	7.7%	87.2%

2年生は、「難しかった」と答えた児童は、7.7%、「難しくなかった」と答えた児童は、87.2%であった。それに対して、1年生は、「難しかった」と答えた児童は、19.5%、「難しくなかった」と答えた児童は、70.7%であった。

授業の理解度と難しさの結果から、1・2年生の児童にとって、授業の内容について無理はなかったと考えられる。しかし、2年生と比較する1年生の児童の方が「難しい」と答えた割合が高かった。難しかった理由を書いている割合も1年生の方が多く、2年生は難しいと答えてその理由を書いている児童は1名だけだった。難しかった点を挙げている児童のほとんどは、「クイズが難しかった」と答えていた。2年生より、

1年生の方が内容は難しいと感じていた可能性があり、もう少し1年生を対象にした内容にしたり、実施する時期によっては、より簡単な内容にしたりした方が良い可能性がある。

(4) 全体的な感想について

児童が自由記述した感想を、ア：肯定的な感想、イ：理解の度合いに関する内容、ウ：今後の活用に関する内容、エ：これから知りたい内容、オ：オンラインによる困りの5カテゴリーに分類した。その結果を表5に示す。

表5：全体的な感想について

	ア	イ	ウ	エ	オ
1年生	34.2%	15.9%	4.9%	3.7%	14.6%
2年生	46.2%	18.0%	10.3%	12.8%	0.00%

※感想のカテゴリーについて

ア：肯定的な感想 イ：理解の度合いに関する内容 ウ：今後の活用に関する内容 エ：これから知りたい内容 オ：オンラインによる困り

感想の多くは、「楽しかった」、「面白かった」に代表される肯定的な感想が多く、「クイズが良かった」という感想があった。また、理解の度合いや今後の活用について書かれている感想もあり、「いらいら、もやもやの気持ちがわかった」「深呼吸をいつするのかわかった」などの記載も見られた。

V. まとめと課題

本研究は、養護教諭をめざす学生のカリキュラムマネジメント力とその実行力の向上と放課後児童クラブの児童を対象に児童のレジリエンス能力の向上に向け、オンラインを活用した取り組みを行い、学生と児童の取り組みから、どのような学びや影響があるかについて明らかにすることを目的とし、オンラインを活用し実践をおこなった。

最後に、研究の目的に沿って整理する。

まず、養護教諭をめざす学生のカリキュラムマネジメント力とその実行力について検討する。

学生に今回の経験が今後の実習や教員になったときに役立ちそうだと思った学生がほとんどで、その理由に児童の実態や児童の抱えている問題に合わせた授業内容で実施したことを挙げており、子どもの現状にあった授業や活動の実施の重要性を体験できたと考えられる。また、対面でなくても授業体験ができることや、なかなか授業をする体験ができなかったので、オンラインでも体験できて良かったと答えているものもあった。これらのことから、阿部（2022）と同様に、オンラインを使ってもある程度、対面で行ったときと同等の学びが得られることが明らかになった²⁾。また、オンラインで実施する上で、板書を使うことからパワーポイントや動画の作成を学生が行ったことで、新たな教材に関する知識を得られた。これは、教材研究に関する新たな視点を対面で実施する以上に得られたと考えられる。

次に、授業を受けた放課後児童クラブの児童への効果については、「楽しかった」、「面白かった」に代表される肯定的な感想が多く、実施した内容の理解についても「クイズが良かった」とあり、概ね無理のない内容になっていたと考えられる。また、「いらいら、もやもやの気持ちがわかった」「深呼吸をいつするのかわかった」、「呼吸の動画がわかりやすい」など理解の度合いや今後の活用について書かれており、レジリエンス能力の向上に寄与する内容であり、良い効果を与えられたと考えられる。

以上の結果をもとに、今後の取り組み方について検討する。今回、オンラインでの実践であったが、学生にとっても、児童においても対面と同様の経験が得られたことが明らかになった。このことから、オンラインを活用して、学生のカリキュラムマネジメント力の向上とその実行力、児童や子どものレジリエンス能力を高めることができると考えられる。今後は、放課後児童クラブと連携を図り継続的に実施していきたい。まず、オンラインを活用して、学生と子どもとコミュニケーションを図り、関係性を築くことからはじめ、実施する授業や活動は計画的に継続したカリキュラムにし、実施していく予定である。その際には、保育者

養成の学生も加え、今回の活動をベースに少しずつ発展させ、その効果を明らかにしていきたい。また、子どもや児童については、実施した内容の定着と活用状況についても縦断的に調査を行いレジリエンス能力についても明らかにしていきたい。

VI. 引用・参考文献

- 1) 大森洋子、高橋千恵、中原早苗、尾川真子、高田和宜、松村佳枝、富士本武明、川崎徳子、中島寿子、白石敏行、「学生の学びを深めるための現場を活用したリモート授業の在り方」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 52 (2022) 53-62
- 2) 阿部真子、「コロナ禍でのアウトリーチ活動の実践～「大学と子ども園（保育園）をつなぐ双方向型でのオペレッタ公演」の試み～」 関西福祉大学紀要 25 (2022) 13-21
- 3) 文部科学省「日本の特別支援教育の状況について」「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議」
https://www.mext.go.jp/kaigisiryoy/2019/09/_icsFiles/afieldfile/2019/09/24/1421554_3_1.pdf
(2022.9.25)
- 4) 読売新聞オンライン「児童虐待最多の10万8050人、コロナで潜在化の恐れ…「家にいるしかなく親の暴力ひどくなった」」<https://www.yomiuri.co.jp/national/20220203-OYT1T50179/> (2022.2.3)
- 5) 亀田佐知子、井戸ゆかり、園田巖、横山章介、早坂信哉「新型コロナウイルス感染症拡大における学童期の子どもをもつ家庭の現状と課題」日本健康開発雑誌 43 (0) (2022) 13-25
- 6) 厚生労働省子ども家庭局「コロナ禍の子育て施策について」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11601000/000766177.pdf> (2021.4.6)

謝辞

本研究で、オンラインを活用した実践にご協力いただきました、放課後児童クラブの保育士さんをはじめ、児童のみなさんに感謝申し上げます。

Curriculum manageability and implementation skills of students aiming to become educators and nursery school teachers Improvement and Initiatives to Improve Children's Resilience Capacity (1) —Online-based practices—

Ayako ANDO, Yoko YANO

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

This study was conducted to improve the curriculum manageability and implementation skills of students who want to become Yogo teachers, and to improve the resilience skills of children in after-school children's clubs through online-based initiatives. The aim of the study was to identify the learning and effects of the initiative on the students and the children.

With regard to the curriculum manageability and implementation skills of the students who are aiming to become Yogo teachers, most of the students felt that this experience would be beneficial for them in their upcoming practical training and when they become teachers. Students were able to experience the importance of implementing lessons and activities that are adapted to the actual situation of the children. It was also beneficial to be able to experience instruction online, which is difficult to experience without face-to-face training. Also like Abe (2022), it was clear that, to some extent, the same degree of learning could be achieved using online as when conducted face-to-face (2). In addition, the students' preparation of the "Power Points" and videos for the on-line instruction gave them knowledge about the new teaching materials, which was considered to be more than they would have had in a face-to-face training.

Secondly, with regard to the effects of the lessons on the children who attended them, most of the feedback was positive with regard to their understanding of the contents implemented, so it is possible to assume that the content was generally not too overwhelming. Some comments were also written about the levels of understanding and for future use, such as "I now understand how irritable and frustrated I feel" and "I now know when to breathe deeply". That would contribute to the improvement of children's resilience capacities. In the near future, we will work with childcare workers at after-school children's clubs to carry out ongoing guidance and to repeat online-based lessons and reviews on a more regular basis. Throughout this process, we will study the children's use of the knowledge, as well as other information gained in lessons, to clarify more about their resilience skills.

Key words : Online-based practices, Curriculum manageability, Implementation skills, Resilience Capacity